

# 福西古墳群（4号墳）

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇一二―二〇

福西古墳群（4号墳）

2013年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人  
京都市埋蔵文化財研究所



# 福西古墳群（4号墳）

2013年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



# 序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様幅広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、駐車場変更に伴う福西古墳群（4号墳）の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

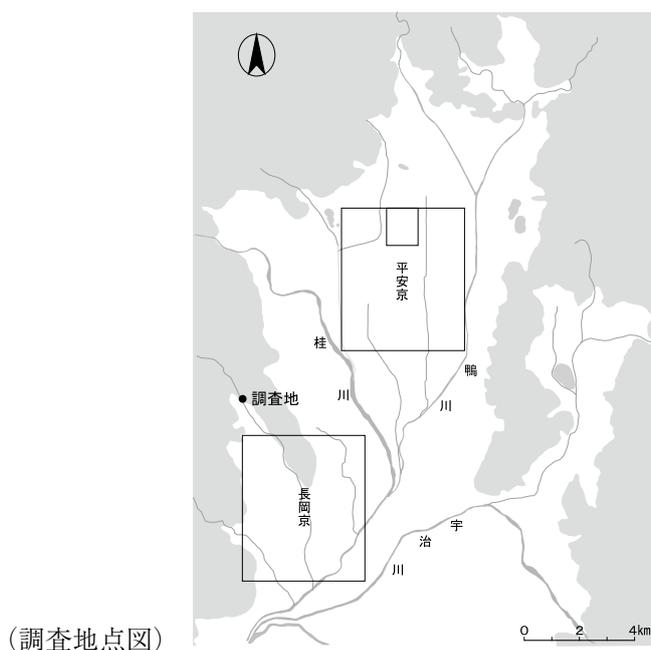
末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成25年4月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
所 長 井 上 満 郎

# 例 言

- |          |  |
|----------|--|
| 1 遺 跡 名  | 福西古墳群（4号墳）（文化財保護課番号 12 S 536）              |
| 2 調査所在地  | 京都市西京区大枝東長町1 - 39                          |
| 3 委 託 者  | 株式会社 大亀工務店 代表取締役 山本勝廣                      |
| 4 調査期間   | 2013年1月31日～2013年2月25日                      |
| 5 調査面積   | 120㎡                                       |
| 6 調査担当者  | 尾藤德行                                       |
| 7 使用地図   | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「中山」を参考にし、作成した。    |
| 8 使用測地系  | 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）             |
| 9 使用標高   | T.P.：東京湾平均海面高度                             |
| 10 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。          |
| 11 遺物番号  | 通し番号を付し、写真番号も同一とした。                        |
| 12 本書作成  | 尾藤德行                                       |
| 13 備 考   | 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。 |



# 目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	3
(1) 位置と環境	3
(2) 既往の調査	3
3. 遺 構	7
(1) 調査	7
(2) 石室	7
(3) 墳丘	11
4. 遺 物	12
(1) 遺物の概要	12
(2) 出土遺物	13
5. ま と め	14

# 図 版 目 次

図版1 遺構	1 調査前墳丘全景（東南東から）
	2 石室検出状況（南から）
図版2 遺構	1 玄室（南から）
	2 玄室南東袖部（北西から）
	3 玄室床面南西角（北東から）
図版3 遺構	1 墳丘断割り状況 東半（南東から）
	2 墳丘断割り状況 西半（南西から）
	3 奥壁墳丘断割り状況（東から）

## 挿 図 目 次

図1	調査前全景（南から）	1
図2	調査風景（北東から）	1
図3	調査区配置図（1：500）	2
図4	調査位置図（1：5,000）	4
図5	調査区平面図（1：100）	8
図6	墳丘断割り南北断面図（1：50）	8
図7	墳丘断割り東西断面図（1：50）	9
図8	石室実測図1（1：80）	10
図9	石室実測図2（1：80）	11
図10	土器実測図（1：4）	13
図11	銀環実測図（1：2）	13
図12	水晶製平玉実測図（1：1）	13
図13	出土遺物	13

## 表 目 次

表1	福西古墳群 古墳番号対照表	5
表2	遺構概要表	7
表3	遺物概要表	12

# 福西古墳群（4号墳）

## 1. 調査経過

調査地は、京都市西京区大枝東長町1-39に所在する。当地の京都生活協同組合コープ洛西における駐車場変更計画に伴い、駐車場内に保存されていた古墳を撤去することとなった。この古墳は、周知の遺跡である古墳時代後期の福西古墳群のうちの最大規模の4号墳である。

福西古墳群は、小畑川の左岸沿いに南北約1km、東西約300mの範囲に古墳が点在する。4号墳は、洛西ニュータウン造成時の1970年に京都市開発局洛西開発室により発掘調査され現地保存されていたもので、報告書が刊行されている<sup>1)</sup>。今回、古墳を撤去にあたり石室を再検出して写真撮影および図面作成を行い、墳丘部分の断割り調査によって墳丘の構築方法を明らかにすることを目的とした。調査は、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）の指導の元、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が担当し、2013年1月から2月に実施した。

古墳は、1970年の調査の後、石室を埋め戻し、墳丘に盛土を施して駐車場内に保存されていた（図1）。調査着手前の状況は、南北約12m、東西約15mの不整形な楕円形で、周囲を0.2～1mのコンクリート擁壁によって囲われていた。高さは駐車場面（現地表面）から2m前後で、頂部は中央から南に向けて凹んだ状態で、その下に石室が残されていることが想定された。

調査は、まず重機によって墳丘部に盛られた近・現代層を掘削し、石室内の埋め戻し土を除去した。古墳は当初想定していたよりも深く埋められていることが明らかとなり、急遽排土の一部を場外へ搬出した。以後は人力によって掘削を進め、墳丘と石室の検出を行い、写真と実測による記録を行った。その後、再度重機によって墳丘断割り作業を行い、墳丘断面の写真撮影と実測を行い、調査を終了した。調査中は適宜、文化財保護課の臨検を受けた。

註

- 1) 『洛西ニュータウン地域の歴史地理学的調査－福西古墳群の発掘調査報告－』京都市都市開発局洛西開発室 1970年



図1 調査前全景（南から）



図2 調査風景（北東から）

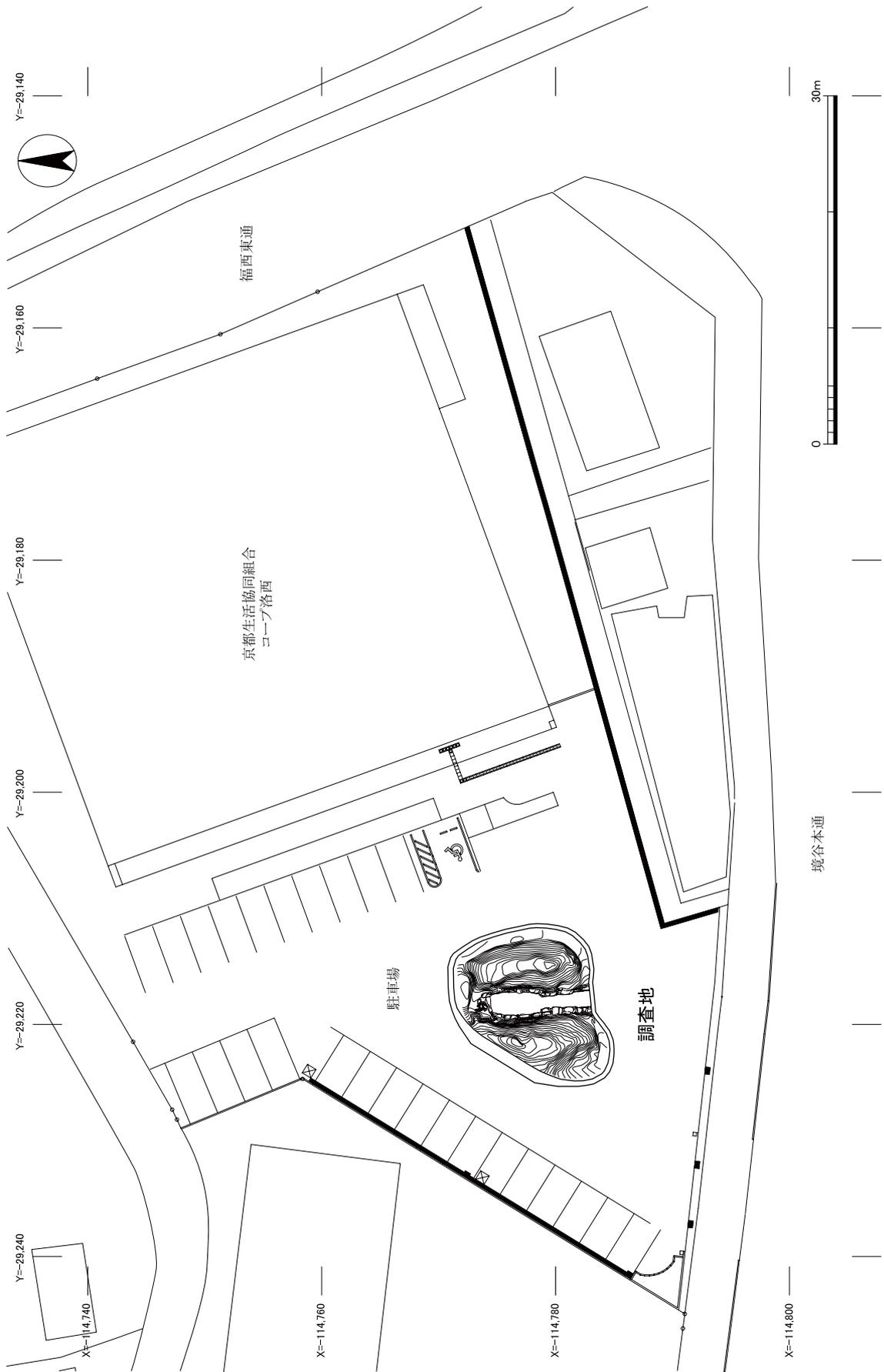


図3 調査区配置図 (1 : 500)

## 2. 位置と環境

### (1) 位置と環境

福西古墳群は、京都市西京区大枝東長町・中山町・東新林町・北福西町に所在する。古墳群は、松尾山から南東方向に延びる向日丘陵の北西端に位置し、小畑川に西面する標高60mから70mの低位段丘上に立地する。現在は北に国道9号線、東に府道中山石見線が通る。府道から東側は竹林、古墳群の南側はニュータウンの集合住宅および戸建住宅、古墳群の北側は旧東長町の集落であるが、新興住宅で竹林が開発され、わずかに果樹園と畑を残している。

### (2) 既往の調査（表1）

福西古墳群については、2007年（平成19年）に文化財保護課によって改訂された「京都市遺跡地図台帳<sup>1)</sup>」を元に説明する。これまでの福西古墳群の調査は、調査した団体ごとに古墳番号や古墳数が異なっており、その関係は表1にまとめた。

1952年に京都府教育委員会が2号墳（京都市遺跡台帳の13号墳）の調査<sup>2)</sup>を行い、組合式家形石棺を検出している。1968年の向日丘陵地遺跡分布調査概要の遺跡地名表において、20基の円墳と古墳とみられる2基の合計22基が報告され、1/25,000地図上にドットされている。1970年に入り古墳群の南半分が京都市都市開発局により洛西ニュータウンの一面に組み込まれたことから、4年にわたり14基の古墳の調査<sup>4)</sup>が実施された。1972年の京都府遺跡地図<sup>5)</sup>では、21基が報告されている。また、京都大学考古学研究会による「嵯峨野の古墳時代<sup>6)</sup>」では21基の古墳と1基の古墳らしき地点が報告されている。

福西古墳群の調査は13号墳の調査を最初とし、古墳群の南半分を占める「洛西ニュータウン」の開発に先立つ調査に伴って、1970年から73年までに合計14基の古墳および古墳推定地の調査を実施した。その後は大規模開発も一段落し、個人住宅などの小規模開発に伴う試掘・立会調査が行われてきた。2006年には集合住宅建設に伴う調査で周知の29号墳のほか、新たに横穴式石室を持つ古墳を1基（32号墳）確認している。これらは、盛土によって建物の下に保護されている。不明確な古墳や新たに発見された古墳も入れて、32基のうち19基は消滅し、保存されているものは数基である。その中でも最大規模のものが、今回の4号墳である。

### (3) 1970年の4号墳調査

調査は1970年7月22日から8月6日、1～3号墳の調査と並行して行われた。古墳は直径23m前後、高さ約3.5mの円墳で、当時にすでに墳丘上部は失われ、石室天井石もすべて抜き取られており、墳丘の中央部が大きく凹んだ状態であった。

墳丘については、北側と南側をそれぞれ東西方向に断ち割って、構築状況が確認された。墳丘は古墳築造時の表土層（旧表土：暗褐色土層）の上に積み上げられていることが明らかになった。

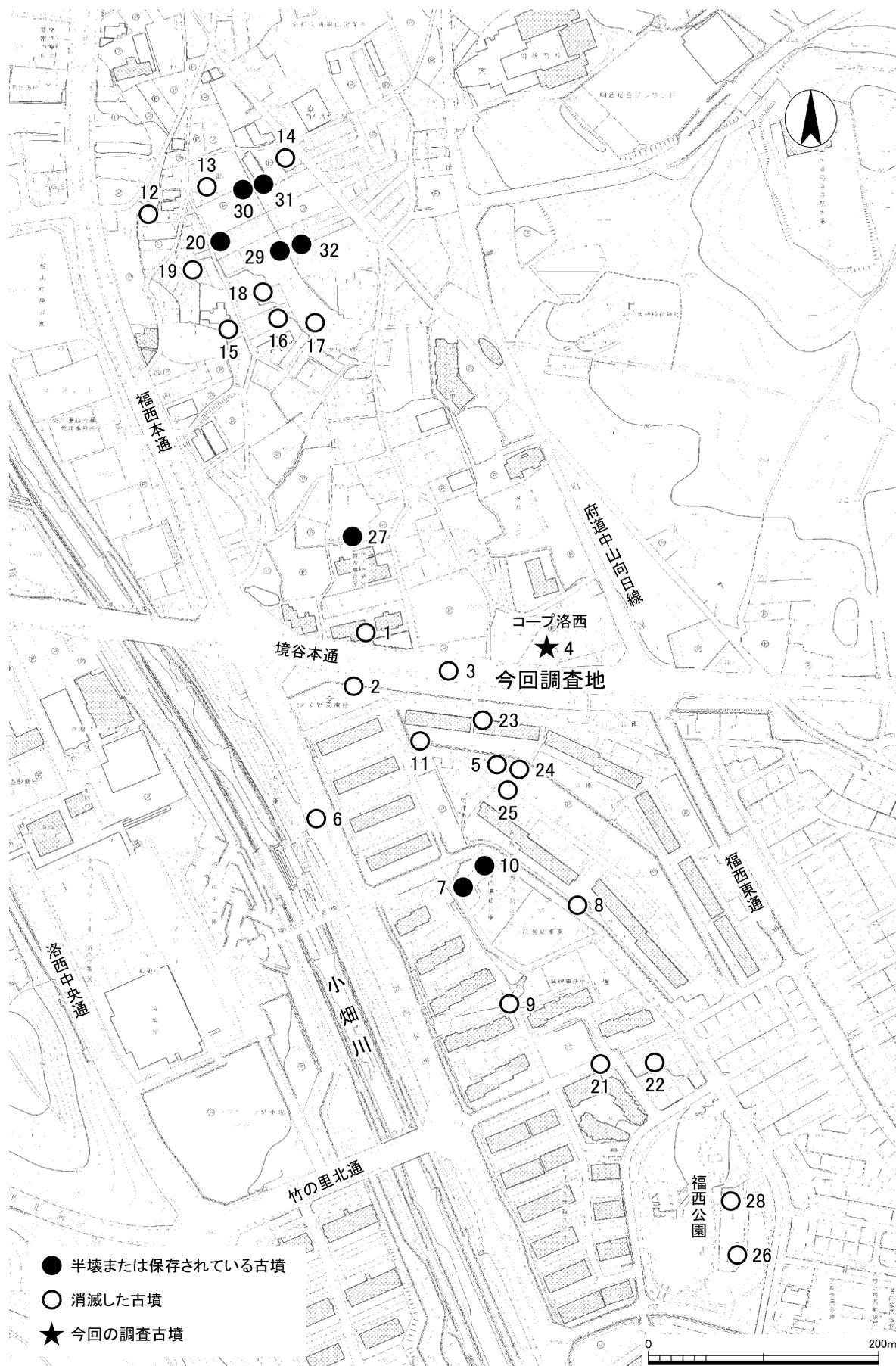


図4 調査位置図 (1 : 5,000)

表1 福西古墳群 古墳番号対照表

古墳番号				墳丘	現状	主体部	出土遺物	調査・註	その他
市	洛西	府図	京大						
1	1	10	11	円墳 径13?	消滅		須恵器高杯蓋	1970年調査、註4-1	古墳?
2	2	11	12		-			1970年調査、註4-1	古墳の形跡なし
3	3	12	13		-			1970年調査、註4-1	古墳の形跡なし
4	4	18	14	円墳 径23 高4.5	保存	横穴式石室 両袖 玄室長4.5 幅2.1 羨道長5.6 幅1.1	須恵器杯・蓋・脚付長頸壺・長 頸壺・直口壺・甗・有蓋高杯、 土師器高杯・台付壺、鉄刀・ 刀子・馬具・耳環、平玉	1970・2004年調査、 註4-1、註9	<b>本報告</b> 調査後、石室は大部 分現地地下保存
5	5	13	15	円墳 径13 高1.2	消滅	木棺直葬?		1971年調査、 註4-2・4-4	古墳ではない?
6	6	17	16		-			1970年調査、註4-1	古墳ではない
7	7	14	18	円墳 径15 高1.5	保存	木棺直葬 礫床排水溝 墓坑長6 幅2.5 深1.5 棺長3.5 幅0.7 木	須恵器杯・蓋(攪乱坑出土)	1971年調査、註4-2	福西遺跡公園内現地 保存
8	8	-	-		消滅	横穴式石室の排水溝?		1971年調査、註4-2	
9	9	-	-	円墳? 封土ら しき高まりあり	消滅	石棺石材片(砂岩)出土		1971年調査、註4-2	
10	10	-	17	円墳 径12 封土なし	保存	横穴式石室 無袖 長6.2 幅1.4	須恵器杯・蓋、土師器	1971年調査、註4-4	福西遺跡公園内現地 保存
11	11	-	-	帆立貝? 全長40 前方部長11 幅15	消滅	墓坑 礫敷 排水溝		1971・72年調査、 註4-2・4-3	
12	-	1	3	円墳	消滅	横穴式石室? 組合式家形石棺			
13	-	2	2	円墳	消滅	組合式家形石棺 石棺を囲む退化型石室 長3.2 幅1.0	石棺内から頭骨・歯 平安時代の須恵器椀・皿・瓶 子、土師器皿	1952年調査、註2	
14	-	3	1	円墳?	消滅				
15	-	4	6	円墳?	消滅				
16	-	5	8	円墳?	消滅	組合式家形石棺?			
17	-	-	9		消滅				
18	-	7	7	円墳?	消滅	組合式家形石棺?			
19	-	8	5	円墳 径6 高0.5	消滅				
20	-	9	-	円墳?	祠	横穴式石室?			周囲より1m程高くなっ ている
21	-	15	20	円墳	消滅				
22		16	19	円墳	消滅				
23	23	-	-	不明	消滅	横穴式石室 礫敷 長2.0 幅1.0	須恵器杯・蓋・壺、金環、釘・ 鏃	1973年調査、註4-4	
24	24	-	-	不明	消滅	小石室 長1.8 幅0.5		1973年調査、註4-4	
25	25	-	-		-			1973年調査、註4-4	古墳ではない
26		19	21	円墳	消滅		須恵器片		
27	-	20	10	円墳	柿畑				周囲より0.5m程の高 まり
28	-	21	×印	円墳 径12 高2.0	消滅	横穴式石室?			
29	-	6	4	円墳 径16~18	半壊	横穴式石室	須恵器甕	2006年調査、註10	建物基礎下に保存
30	-	-	-	?	半壊	横穴式石室		註7 22号墳として報告	石室保存
31	-	-	-	?	半壊	横穴式石室 片袖		註8 28号墳として報告	石室検出面での調査 建物基礎下に保存
32	-	-	-		半壊	横穴式石室	須恵器杯・蓋・壺	2006年調査、註10	建物基礎下に保存

※ 単位はm

以下の文献を参考に作成した

市 =註1、『京都市遺跡地図台帳』京都市文化市民局 2007年

洛西 =註4-1~4、『洛西ニュータウン地域の歴史地理学的調査』京都市都市開発局洛西開発室 1970~1973年

府図 =註5、『京都府遺跡地図 史跡・名勝・天然記念物および埋蔵文化財包蔵地所在地地図』第4分冊 京都府教育委員会 1972年

京大 =註6、『嵯峨野の古墳時代』京都大学考古学研究会 1971年

石室は南に開口する両袖式横穴式石室で、全長10.18m、玄室長4.5m、羨道長5.68m、幅は玄室奥壁で1.88m、玄室中央で2.14m、玄室玄門部で1.86m、羨道袖部で1.16m、羨道南端部は大きく開き2.1mとなる。天井石はすべて失われているが、玄室奥壁は2段、側壁は2～3段、羨道部分の側壁は3段の石積みが残存していた。玄室床面には0.1～0.2mの礫を用いた上位敷石と0.1m前後の礫を用いた下位敷石の2面の敷石面が確認され、さらにその下には0.1m前後の厚さの礫層が施されていた。羨道入口床面には閉塞石の一部とみられる大型の石が据えられていた。

遺物は、玄室床面では疎らであったが、特に羨道床面では中央から南にかけての西壁際に集中して多量の土器類が出土した。土器類は須恵器を主体として、土師器がごく少量あり、雲珠・鞍・轡・鏡板などの馬具類や大刀・刀子・鎌・釘など鉄製品が出土した。出土した須恵器の年代観から、6世紀後半に築造され、7世紀前半ごろまで追葬が行われたとみられる。

#### 註

- 1) 『京都市遺跡地図台帳』京都市文化市民局 2007年
- 2) 藤沢長治「京都大枝福西古墳」『京都府埋蔵文化財調査報告』第22冊 京都府教育委員会 1961年
- 3) 堤 圭三郎・高橋美久二「向日丘陵地遺跡分布調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会 1968年
- 4) 1 第1次調査、1970年7～8月、4・6号墳『洛西ニュータウン地域の歴史地理学的調査－福西古墳群の発掘調査報告－』京都市都市開発局洛西開発室 1970年  
2 第2次調査、1971年7月、5・7～11号墳『洛西ニュータウン地域の歴史地理学的調査－発掘と歴史的景観・土地利用の変遷に関する調査報告－』京都市都市開発局洛西開発室 1972年  
3 第3次調査、1972年12月、11号墳再調査『洛西ニュータウン地域の歴史地理学的調査－発掘と歴史的景観・土地利用の変遷に関する調査報告－補遺編』京都市都市開発局洛西開発室 1973年  
4 第4次調査、1973年9月、5・23・25号墳『洛西ニュータウン地域の歴史地理学的調査 補遺編 その2』京都市都市開発局洛西開発室 1973年
- 5) 『京都府遺跡地図 史跡・名勝・天然記念物および埋蔵文化財包蔵地所在地地図』第4分冊 京都府教育委員会 1972年
- 6) 『嵯峨野の古墳時代』京都大学考古学研究会 1971年
- 7) 吉村正親「福西22号墳(90MK10)」『京都市内遺跡立会調査概報 平成3年度』京都市文化観光局 1991年
- 8) 玉村登志夫「福西28号墳 No.68」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成4年度』京都市文化観光局 1992年
- 9) 北田栄造「福西4号墳 No.93」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成16年度』京都市文化市民局 2005年
- 10) 菅田 薫『福西古墳群』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-5 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2006年

### 3. 遺 構

#### (1) 調査

古墳は駐車場の中央に墳丘を突出する形で残されており、周囲を高さの低い石積みとコンクリートの擁壁によって囲われていた。今回は、このコンクリートの擁壁を残して内側を調査区とし、墳丘および石室の再検出および記録の作成を行った。

まず、調査着手前に墳丘の状況を記録するために全景写真撮影を行った（図版1-1）。1970年調査の後には整備事業として、保護のために墳丘には盛土、そして石室には埋め土が施されていた。本調査では、これらの除去を重機によって行った。墳丘の保護のための盛土は0.5～1.0mの厚さがあり、調査前に想定していたよりも深い箇所でも墳丘および石室が保存されていることがわかった。残存していた墳丘の上端は現地表面から1.5mの高さがあり、石室側壁石の上端の高さはほぼ現地表面と同一、石室床面は約2.2m下で確認した。石室はほぼ南に向け開口しており、南端は調査区外の南へ延びていた。

前回調査時の保護のための盛土を除去した墳丘の検出と石室内の精査を行い、全景写真・石室内個別写真などの撮影（図版1-2、2-1～2-3）と石室奥壁・側壁両面のオルソー測量、墳丘のトータルステーションによる平面測量（図5）を実施した。

今回の調査は古墳が壊され消滅することを前提にしていた。墳丘の構築状況の記録を作成するため、再度重機を用いて、墳丘の断割り調査を実施した。まず、墳丘の南半部について残存している石室の上面まで墳丘盛土を除去し、石室玄室の南北中央に直交して石室の東外側および西外側の墳丘に幅0.5～1mの断割トレンチを設定し、地表下2m前後の地山まで掘削した（図5 A-A'断面）。さらに石室主軸方向については、奥壁の北外側に幅0.5m断割トレンチを設定し、同様に掘り下げた。そして、各断面の精査を行い、写真撮影および実測図を作成して、調査を終了した。

#### (2) 石室（図8・9、図版1・2）

南に開口する両袖式の横穴式石室である。1970年に調査された石室を再検出した。天井石は1970年調査時まで失われていた。今回の調査範囲では石室羨道の南端約1m分の入口部分が南調査区外となり、確認できなかった。

今回検出した石室は、玄室全体と入り口部分を欠く羨道で南北約8.8m分である。奥壁2段、側壁2～3段の石積みが残されており、ほぼ1970年調査時の状態が保たれていたことを確認した。

床面で計測した長さは玄室奥壁から玄門まで4.4m、羨道部分は4.2mであった。同様に幅は玄室

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
古墳時代	横穴式石室、墳丘盛土	

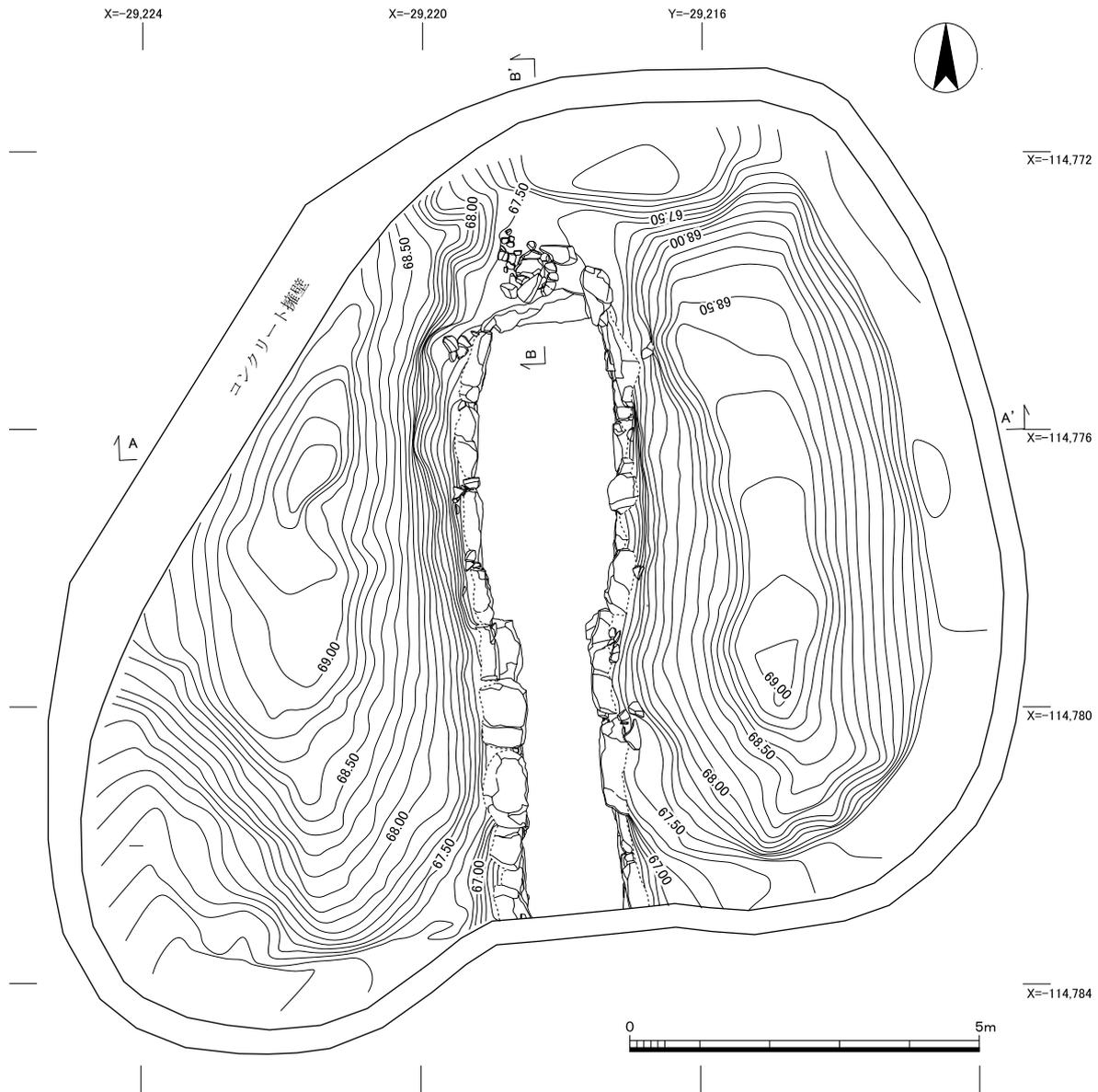


図5 調査区平面図 (1 : 100)

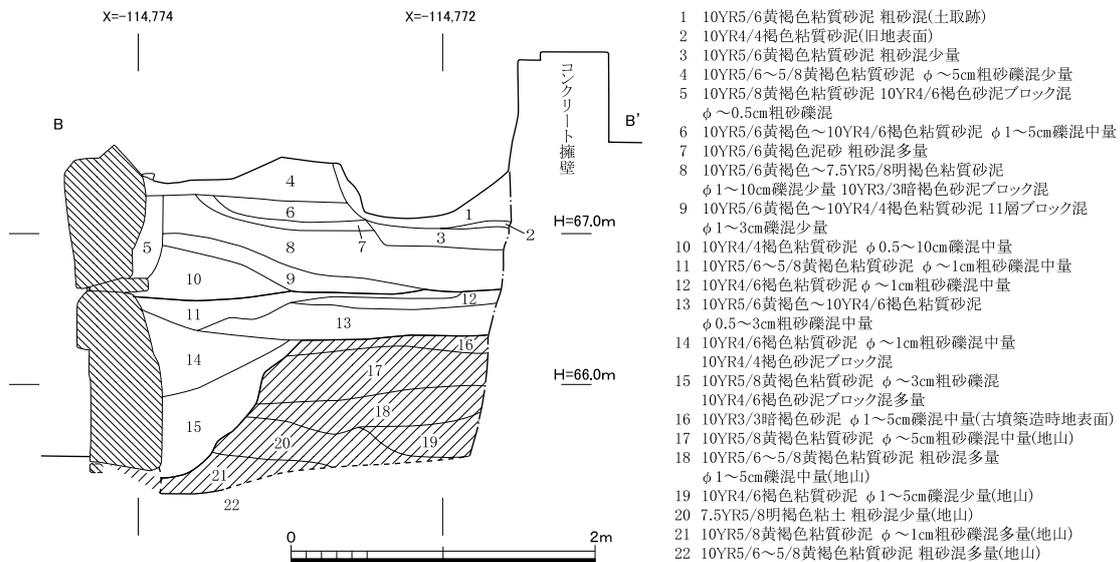
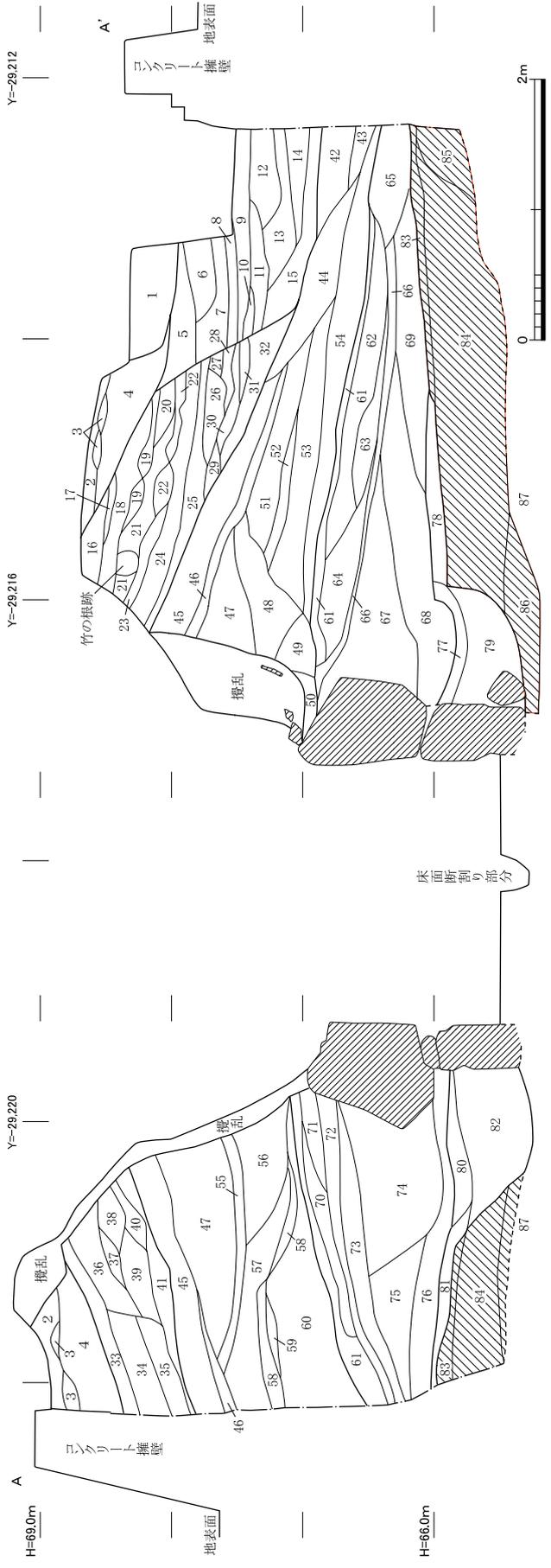
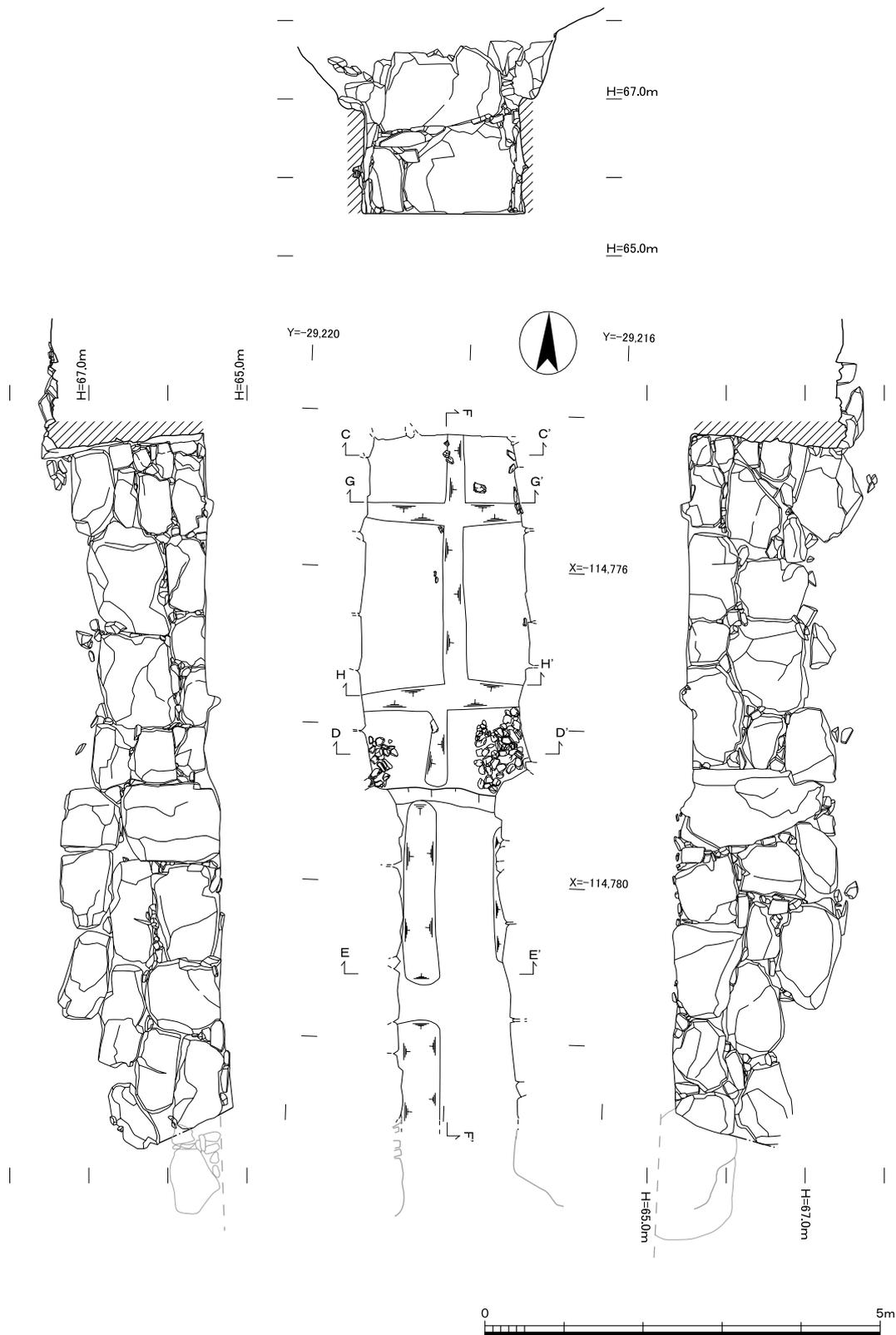


図6 墳丘断割り南北断面図 (1 : 50)



- 1 10YR5/6黄褐色粘質砂泥 10YR4/4褐色粘質砂泥・ブロック混
- 2 7.5YR5/6明褐色粘質砂泥
- 3 10YR3/3暗褐色粘質砂泥・ブロック混
- 4 10YR5/6黄褐色粘質砂泥 φ1~3cm礫混少量
- 5 10YR5/6黄褐色粘質砂泥 10YR3/4暗褐色粘質砂泥・ブロック混 φ1~5cm礫混少量
- 6 10YR5/6黄褐色粘質砂泥 10YR3/3暗褐色粘質砂泥・ブロック混
- 7 10YR5/6黄褐色粘質砂泥 10YR3/3暗褐色粘質砂泥・ブロック混
- 8 10YR5/6黄褐色粘質砂泥 10YR3/4暗褐色粘質砂泥・ブロック混
- 9 10YR5/6黄褐色粘質砂泥 10YR3/3暗褐色粘質砂泥・ブロック混
- 10 10YR5/6黄褐色粘質砂泥 10YR3/3暗褐色粘質砂泥・ブロック混
- 11 10YR3/3暗褐色粘質砂泥 10YR5/6黄褐色粘質砂泥
- 12 10YR5/6黄褐色粘質砂泥 10YR3/3暗褐色粘質砂泥・ブロック混
- 13 10YR5/6黄褐色粘質砂泥 10YR3/3暗褐色粘質砂泥・ブロック混
- 14 10YR5/6黄褐色粘質砂泥 10YR3/3暗褐色粘質砂泥・ブロック混
- 15 10YR5/6黄褐色粘質砂泥 10YR3/3暗褐色粘質砂泥・ブロック混
- 16 10YR4/4褐色粘質砂泥
- 17 7.5YR5/6明褐色粘質砂泥 10YR4/4褐色粘質砂泥
- 18 10YR4/4褐色粘質砂泥
- 19 10YR4/4褐色粘質砂泥 10YR4/4褐色粘質砂泥・ブロック混
- 20 10YR4/4褐色粘質砂泥 10YR3/4暗褐色粘質砂泥
- 21 10YR5/6黄褐色粘質砂泥
- 22 10YR5/6黄褐色粘質砂泥 10YR3/3暗褐色粘質砂泥
- 23 10YR5/6黄褐色粘質砂泥 10YR3/3暗褐色粘質砂泥・ブロック混
- 24 10YR5/6黄褐色粘質砂泥 10YR3/3暗褐色粘質砂泥・ブロック混
- 25 10YR5/6黄褐色粘質砂泥 10YR3/3暗褐色粘質砂泥・ブロック混
- 26 10YR5/6黄褐色粘質砂泥 10YR3/3暗褐色粘質砂泥・ブロック混
- 27 10YR5/6黄褐色粘質砂泥 10YR3/4暗褐色粘質砂泥・ブロック混
- 28 10YR5/6黄褐色粘質砂泥
- 29 7.5YR5/6明褐色粘質砂泥 粗砂混
- 30 10YR5/6黄褐色粘質砂泥 10YR4/3~4/4にS、黄褐色~褐色粘質砂泥・ブロック混 少量
- 31 10YR5/6黄褐色粘質砂泥
- 32 10YR5/6黄褐色粘質砂泥 φ1~3cm礫混少量
- 33 10YR5/6黄褐色粘質砂泥 10YR3/4暗褐色粘質砂泥 少量
- 34 10YR5/6黄褐色粘質砂泥 φ1~3cm礫混少量
- 35 10YR5/6黄褐色粘質砂泥
- 36 10YR5/6黄褐色粘質砂泥
- 37 10YR5/6黄褐色粘質砂泥 φ1~1cm礫混少量
- 38 10YR4/4褐色粘質砂泥 10YR3/3暗褐色粘質砂泥
- 39 10YR5/6黄褐色粘質砂泥 φ1~1cm礫混少量
- 40 10YR5/6黄褐色粘質砂泥 10YR3/3暗褐色粘質砂泥
- 41 10YR5/6黄褐色粘質砂泥 φ1~1cm礫混少量
- 42 10YR5/6黄褐色粘質砂泥 10YR4/6褐色粘質砂泥・ブロック混 φ~2cm粗砂礫混少量
- 43 10YR5/6黄褐色粘質砂泥 φ1~3cm礫混少量
- 44 10YR5/6黄褐色粘質砂泥 φ1~5cm礫混少量
- 45 7.5YR5/6明褐色粘質砂泥 φ1~5cm礫混少量
- 46 10YR5/6黄褐色粘質砂泥 φ~2cm粗砂礫混少量
- 47 7.5YR5/6明褐色粘質砂泥 φ~2cm粗砂礫混少量
- 48 10YR5/6黄褐色粘質砂泥 φ~5cm礫混少量
- 49 10YR5/6黄褐色粘質砂泥 φ~5cm礫混少量
- 50 7.5YR5/6明褐色粘質砂泥 φ~5cm礫混少量
- 51 10YR5/6黄褐色粘質砂泥 φ~5cm礫混少量
- 52 10YR5/6黄褐色粘質砂泥 φ~5cm礫混少量
- 53 10YR5/6黄褐色粘質砂泥 φ~5cm礫混少量
- 54 10YR4/4褐色粘質砂泥 φ~2cm礫混少量
- 55 10YR5/6黄褐色粘質砂泥 φ~2cm礫混少量
- 56 10YR5/6黄褐色粘質砂泥 φ~2cm礫混少量
- 57 10YR5/6黄褐色粘質砂泥 φ~2cm礫混少量
- 58 10YR5/6黄褐色粘質砂泥 φ~2cm礫混少量
- 59 10YR5/6明褐色粘質砂泥 10YR3/4暗褐色粘質砂泥 少量 φ0.5~3cm礫混
- 60 10YR5/6黄褐色粘質砂泥 φ1~3cm礫混少量
- 62 7.5YR5/6明褐色粘質砂泥 φ0.5~3cm礫混少量
- 63 10YR5/6黄褐色粘質砂泥 φ1~10cm礫混少量
- 64 10YR5/6黄褐色粘質砂泥
- 66 10YR5/6黄褐色粘質砂泥 10YR3/4暗褐色粘質砂泥・ブロック混 φ~3cm礫混少量
- 67 10YR5/6黄褐色粘質砂泥 φ0.5~3cm礫混少量
- 68 7.5YR5/6明褐色粘質砂泥 φ~5cm礫混少量
- 69 7.5YR5/6明褐色粘質砂泥 10YR3/4暗褐色粘質砂泥 少量 φ0.5~3cm礫混
- 70 10YR5/6明褐色粘質砂泥 10YR3/4暗褐色粘質砂泥 少量 φ0.5~3cm礫混
- 71 10YR5/6明褐色粘質砂泥 10YR3/4暗褐色粘質砂泥 少量 φ0.5~3cm礫混
- 72 10YR5/6明褐色粘質砂泥 φ1~3cm礫混少量
- 73 10YR5/6明褐色粘質砂泥 φ1~3cm礫混少量
- 74 10YR5/6明褐色粘質砂泥 φ0.5~3cm礫混少量
- 75 10YR5/6明褐色粘質砂泥 φ0.5~3cm礫混少量
- 76 7.5YR5/6明褐色粘質砂泥 φ1~3cm礫混少量
- 77 10YR3/3暗褐色粘質砂泥 φ0.5~10cm礫混少量
- 78 10YR3/3暗褐色粘質砂泥 φ0.5~10cm礫混少量
- 79 7.5YR5/6明褐色粘質砂泥 φ0.1~5cm粗砂礫混少量
- 80 10YR5/6黄褐色粘質砂泥 φ0.5~2cm礫混少量
- 81 7.5YR4/6褐色粘質砂泥 φ0.5~3cm礫混少量
- 82 7.5YR4/6褐色粘質砂泥 φ0.5~3cm礫混少量
- 83 10YR4/4褐色粘質砂泥 10YR3/4暗褐色粘質砂泥・ブロック混 φ1~3cm礫混少量
- 84 10YR5/6明褐色粘質砂泥 φ0.5~5cm礫混少量
- 85 7.5YR5/6明褐色粘質砂泥 φ~1~5cm礫混少量
- 86 10YR5/6明褐色粘質砂泥 φ~1~3cm礫混少量
- 87 7.5YR5/6明褐色粘質砂泥 粗砂混

図7 墳丘断割り東西断面図 (1:50)



※ 南端のグレー線の石は、1970年調査時の実測図から追加したもの。

図8 石室実測図1 (1 : 80)

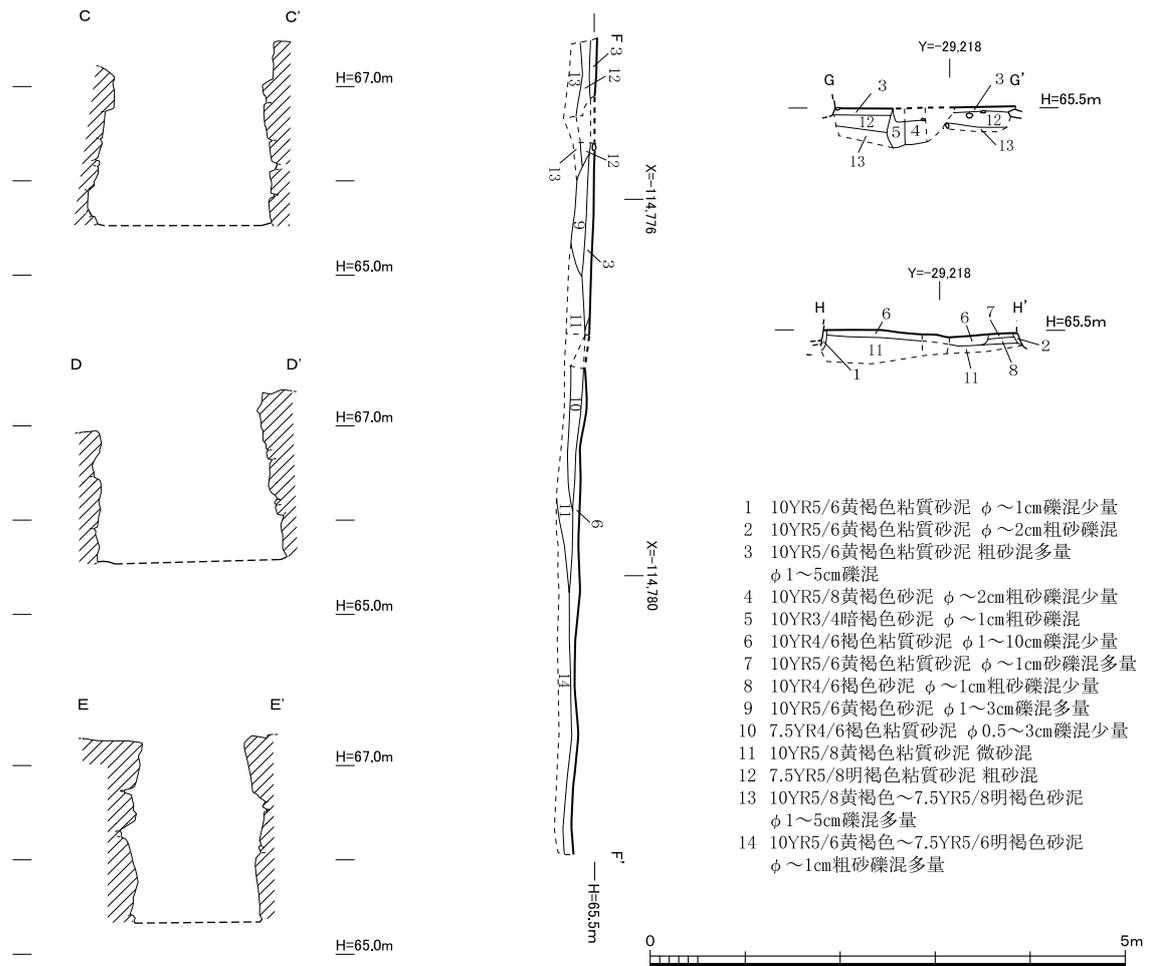


図9 石室実測図2 (1:80)

奥壁部で1.78m、中央付近で2.10m、玄門部分で1.90m、羨道は北端で1.22m、南端で1.45mである。石室の主軸は座標北に対して約2度西へ振れる。

奥壁には側壁や羨道に使われているよりも大きめの石材を2段に積み、玄門にあたる部分にはやや大きめの石材を縦使いしている。図9に示したように、石積みには持ち送りが採用されており、上部の幅が奥壁部分C-C'断面では1.6m、玄門に近いD-D'断面では1.6m、羨道中程のE-E'断面では1.1mとなっている。それぞれ床面での幅よりも0.2m前後狭くなっている。

床面は玄室では標高65.5mで検出したが、1970年調査時に検出された敷石面はほとんど確認できなかった。わずかに玄室南部、玄門付近に直径0.1m前後大の川原石の集中部分を検出した。1970年調査時の下位敷石面とみられる。また、床面に幅0.2m前後の溝状の掘り込みを確認した。これらは1970年調査に行われた床面に対する断ち割り溝の痕跡と考えられ、本調査で敷石面が確認できなかったのも先の調査により掘削され除去されたためとみられる。

### (3) 墳丘 (図5~7、図版3)

墳丘は南半部を除去し、玄室中央部に主軸に直交する東西方向(図7)と、玄室奥壁の北側に石室主軸の北延長となる南北方向(図6)に断ち割って、土層観察用のセクションを残した。

古墳築造時の地表土層を東西断面では標高66.0～66.15m（図7-83）、南北断面では66.35m（図6-16）で確認した。以下の層はいわゆる地山である。当時の地表面は緩やかに北から南への傾斜面である。古墳の構築はまず、地表面に石室を構築するための掘り込みから始められた。掘り込みの掘形は仕上がる石室よりもそれぞれ1mほど大きく、地表面から0.5～0.7mの深さで掘られていた。掘形底面は奥壁付近で標高65.4m、A-A'断面部分・羨道南端部分で65.3mであった。石室石材は1段目を掘形底部に据え、その裏込めとしてほぼ地表面の高さまで埋め（図6-14・15、図7-79・82）、さらに石材上部まで盛土（図6-11～13、図7-77・78・80・81）を行う。続いて2段目の石材を据え、石材の近くは石材の高さ、離れるに従って薄くなるように盛土（図6-4～10、図7-61～76）をする。さらに3段目同様に墳丘外側が薄くなるように盛土（図7-42～60）が行われ、天井石が据えられて同様の盛土（図7-16～41）、そして天井石を覆い墳丘を整える盛土（図7-2～15）がなされている。

墳丘の上部はすでに失われており、外表施設に関する情報は全く得ることができなかった。

## 4. 遺物

### （1）遺物の概要（表3）

遺物は整理箱に1箱出土した。

1970年調査時には、石室内から須恵器高杯・杯・蓋・壺・台付壺・甕、土師器高杯・皿・台付壺、直刀などが出土している。また、羨道中央部で和同開珎が出土している。

本調査では、石室内には遺物はほとんど残存おらず、わずかに残った敷石の間から鉄製品が出土した。また、墳丘盛土から土器の小片が出土した。そのほかの遺物は埋め戻し時の残土に混入して出土したものである。

古墳時代の遺物には、土師器長頸壺片、須恵器杯・壺、銀環、鉄製の馬具や刀子と考えられるものが出土した。

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代	土師器、須恵器、金属製品		土師器1点、銀環1点		
奈良時代 ～平安時代	土師器、須恵器、瓦、石製品		水晶製平玉1点		
中世	瓦器				
合計		2箱	3点（1箱）	1箱	0箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

奈良時代から平安時代の遺物には、土師器皿、瓦、水晶製平玉がある。石室内の埋め戻し残土から出土した。平玉の帰属する時代は不明確であるが、1970年調査では和同開珎が出土しており、追葬などの儀式的時に供えられたものとも考えられる。

中世の遺物には、瓦器碗がある。石室内から出土した。盗掘時に廃棄されたものの可能性がある。

## (2) 出土遺物 (図10～13)

**土師器長頸壺 (1)** (図10・13) 頸部から口縁部のみ出土した。口径約10cm、残存高10cm。磨滅が激しいが、外面は丁寧なヨコナデが残る。1970年調査時にも、頸部が破損した土師器長頸平底壺が出土している。玄室袖部の南西角の集石部分から出土した。

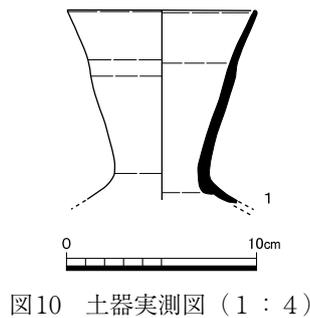


図10 土器実測図 (1 : 4)



**銀環 (2)** (図11・13) 中実の銅製環を銀箔でつつんだ耳環である。縦長のC字状で、長径2.84cm、短径2.53cm、厚さ約0.74cm、重さ14.04gである。表面は風化し、緑青を呈するが、一部に銀の輝きも残っている。玄室中央東側の埋土より出土した。

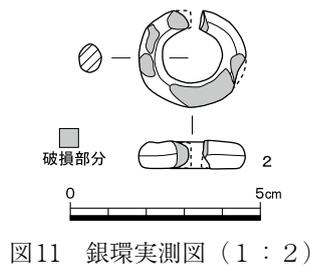


図11 銀環実測図 (1 : 2)



**水晶製平玉 (3)** (図12・13) ほぼ円形で、レンズ状に中央部が厚く、断面は紡錘状を呈する。直径1.92cm、最大厚0.95cm、周縁厚0.45cm、重さ5.52gである。透明で、内部に気泡・ヒビがわずかに入る。レンズ面は丁寧に仕上げられている。玄室南西角の埋土から出土した。

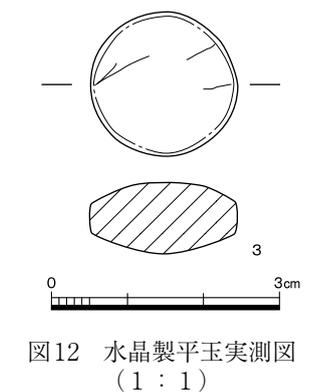


図12 水晶製平玉実測図 (1 : 1)



図13 出土遺物

## 5. ま と め

本調査では墳丘を断ち割って調査を進め、1970年調査時には解明できなかった墳丘の構築方法が明らかとなった。墳丘は、天井石を積んだあと、粗砂礫の多い土を盛土して墳丘を作り、粗砂礫のほとんど混じらない土を土饅頭風に盛土して中央部の墳丘を盛りあげる。その後、その裾を削平して、墳丘周りを版築状に粗砂礫の多い土を積み上げて墳丘を完成させている。このような築造方法は、近くで同時代に造られた大枝古墳群などには見られないもので、この古墳を特色づけている。

今回、埋め戻し土から奈良時代から平安時代と考えられる水晶製平玉が出土している。1970年調査時には和同開珎が出土しており、追葬などの何らかの儀式が行われたことが考えられる。古墳時代以降、玉生産を行った史跡出雲玉作遺跡に隣接する蛇喰遺跡<sup>じやぼみ<sup>1)</sup></sup>では、奈良時代以降の遺構などから300点以上の頁岩・碧玉・石英製の平玉未製品が出土している。水晶製平玉未製品はわずか20点しか出土しておらず、その貴重さが窺え、どのような使われ方をしたのか興味深い資料である。

註

- 1) 『蛇喰遺跡発掘調査報告書』 鳥根県八束郡玉湯町教育委員会 1999年

# 圖 版





1 調査前墳丘全景（東南東から）



2 石室検出状況（南から）



1 玄室（南から）



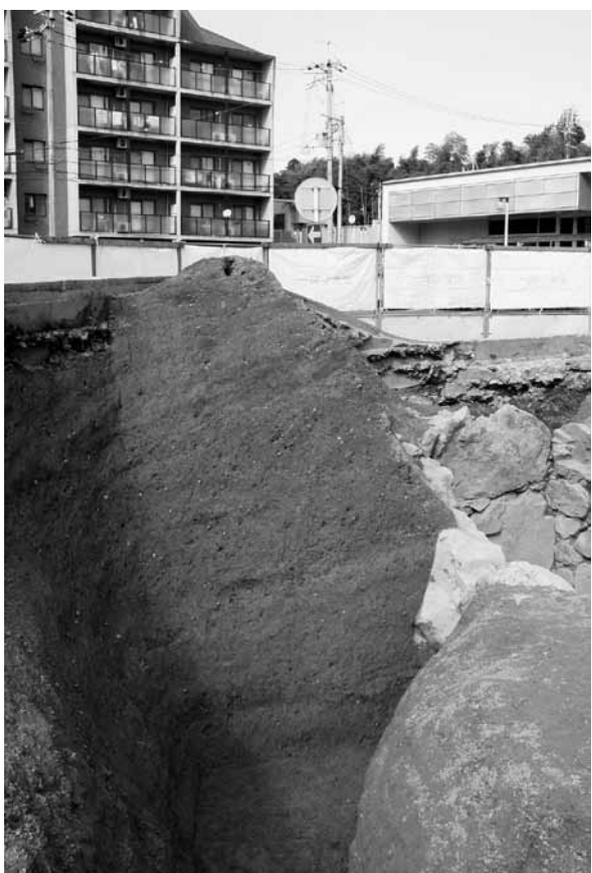
2 玄室南東袖部（北西から）



3 玄室床面南西角（北東から）



1 墳丘断割り状況 東半 (南東から)



2 墳丘断割り状況 西半 (南西から)



3 奥壁墳丘断割り状況 (東から)

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	ふくにしこふんぐん (よんごうふん)							
書名	福西古墳群 (4号墳)							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2012-20							
編著者名	尾藤德行							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2013年4月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふくにしこふんぐん 福西古墳群	きょうとしにしきょうく 京都市西京区 おおえひがしながちょう 大枝東長町  1-39	26100	998	34度 57分 54秒	135度 40分 48秒	2013年1月 31日～2013 年2月25日	120㎡	駐車場変更
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
福西古墳群	古墳	古墳時代	横穴式石室、墳丘盛土	土師器、須恵器、金属製品		墳丘を断ち割り、構築方法を確認した。		
		奈良時代～平安時代		土師器、須恵器、瓦、水晶製平玉				
		中世		瓦器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-20

## 福西古墳群（4号墳）

発行日 2013年4月30日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1  
〒602-8435 TEL 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地  
〒604-0093 TEL 075-256-0961